

原 著

感情比喩の理解に及ぼす聞き手の当事者性¹

岡 隆之介 京都大学大学院教育学研究科²

楠見 孝 京都大学大学院教育学研究科

The effects of the listener's involvement on understanding metaphors about emotion

Ryunosuke Oka (Graduate School of Education, Kyoto University)

Takashi Kusumi (Graduate School of Education, Kyoto University)

The purposes of this study were to examine the effect of a listener's involvement on a speaker's metaphor production and on a third person's metaphor appraisal of emotional and politeness intensity. In Study 1, participants ($N=119$) were assigned to both an involved condition (a speaker is supposed to explain his/her emotion to a listener who aroused the speaker's emotion) and a not-involved condition, and asked to make metaphors that expressed his/her worst lecture and cooking experiences. In Study 2, participants ($N=24$) were asked to rate the negative emotional intensity of metaphors which were collected in Study 1 as readers of those metaphors. In Study 3, participants ($N=167$) were asked to rate the harshness and indirectness of the metaphors, again as readers of those metaphors. Results showed that there were metaphors specific to each of the involved and not-involved conditions. In addition, metaphors produced in the involved condition were rated higher in harshness and negative emotional intensity, and lower in indirectness of expression, compared to metaphors created in the not-involved condition.

Key words: metaphor, metaphor comprehension, listener's involvement, emotion

問題と目的

本研究では、話し手がネガティブな感情的体験（感情をともなう体験）に関する感想を述べるときに用いる感情を表した比喩表現（以下、感情比喩と呼ぶ）を、その表現の直接的な聞き手ではない第三者である読み手（以下、読み手と呼ぶ）がどのように評価するかを明らかにする。とりわけ、本研究では読み手の感

情比喩に対する感情強度と配慮の程度に関わる印象評価を研究対象とする。そして、これらの印象評価に影響を与える要因として、その感情比喩の話し手が想定する聞き手（以下、聞き手と呼ぶ）に焦点を当てる。

感情比喩に対する感情強度の印象評価

感情比喩から読み手が受け取る情報のひとつとして感情強度が挙げられる。感情強度とは、聞き手や読み手がある表現を読んだときに感じる、感情に関する強弱の度合いを指す。本研究では特に、読み手がどのように感情強度を評価するかに焦点を当てる。読み手は感情比喩から感じるある感情次元の感情強度の強弱を評価することができる。たとえば、ネガティブな感情を表した感情比喩でも、“この食べ物は動物のエサみたいだ”という表現よりも、“この食べ物は味が喧嘩しているみたいだ”という表現の方が、読み手はネガティブな感情の強度（例：食べ物のまずさにとともなう不快感）を低く見積るだろう。さらに読み手は、こうした感情強度の評価を複数の感情次元に適用するこ

Correspondence concerning this article should be sent to: Ryunosuke Oka, Graduate School of Education, Kyoto University, Yoshida-honmachi, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan (e-mail: Qualia1006@gmail.com)

¹ 本論文の内容の一部は、2015年に開催された日本認知心理学会第13回大会（於：東京大学本郷キャンパス）において発表された。

² 滋賀医科大学の小島隆次先生からは本論文に対して多くの貴重なご意見をいただきました。また、大阪市立大学の平知宏先生からは、本論文の初稿執筆時において貴重なご意見をいただきました。ここに感謝の意を表します。本研究は、京都大学リーディング大学院デザイン学連携プログラムによる研究助成を受けました。

とで、感情比喩が表す感情の種類（例：悲しみ、怒り）を判別することができることも示唆されている（小島・岡・楠見, 2015; 松尾, 1998）。松尾（1998）は、大学生から収集された喜び、悲しみ、そして怒りに関する感情比喩の感情の種類を、SD法の評定結果をもとに抽出した活動性と評価の2つの因子で分類することを試みた。そして、これら2つの因子に基づく正準判別分析によって100%の正判別率で感情比喩の種類を分類できることを明らかにした。さらに小島他（2015）は、松尾（1998）で報告された感情比喩の感情の種類を目的変数とし、Affect Grid (Russell, Weiss, & Mendelsohn, 1989) の覚醒-睡眠と快-不快の評定値を説明変数とする正準判別分析によって、約96%の正判別率で感情比喩の感情の種類を分類できることを明らかにした。

以上のように、感情強度の強弱の評価は感情比喩の種類によって異なることが示されてきたが、その他にどういった要因が感情強度の強弱の評価に影響しているのかについては明らかになっていない。こうした要因の1つとして、本研究では話し手と聞き手の関係性に注目する。感情比喩がコミュニケーションで用いられるということ（Fainsilber & Ortony, 1987）を踏まえると、読み手の感情比喩の強度の評価を考えるうえでコミュニケーションにおける会話者間の関係性を考慮することは重要である。さらに、話し手が感情を表す際には、聞き手がどういった立場の人であるかを想定して表現を産出するだろう。このような、話し手がどのような聞き手を想定するかという要因は、話し手が産出する感情比喩や、その感情比喩に対する読み手の感情強度の評価に影響を与える可能性がある。

話し手が想定する聞き手の当事者性と感情比喩

話し手が感情的体験を説明する場合、聞き手がその感情的体験に関わっていたかどうかは、話し手がどのような表現を用いるのかを決定する際に重要な要因である。特に、聞き手がその感情を引き起こした当事者である場合にはなおのことである。なぜなら、聞き手が話し手の感情を引き起こした当事者（以下、当事者とする）である場合、話し手は、聞き手が話し手の感情を引き起こした体験について知っているという共通基盤（Clark, 1996）を考慮して表現を選択する必要があるからである。

話し手の想定する聞き手が誰であるかによって、話し手のネガティブな感情的体験を表した表現が左右されることに示唆を与える理論として、ポライトネス理論（Brown & Levinson, 1987）があげられる。ポライトネス理論では、話し手は聞き手の面子を脅かすような言語行動をする場合に、聞き手に配慮した表現を選択すると主張する。ポライトネス理論に基づけば、話し手のネガティブな感情的体験について聞き手が当事

者である場合、話し手は聞き手に配慮してより間接的な表現形式を選択すると考えられる。またこのポライトネス理論と関連して、岡本（2000）は、話し手が聞き手にとってネガティブな情報を伝達する（たとえば、進級試験に落ちたことを、話し手が進級試験を受けた聞き手に伝える）場合に、聞き手に配慮して表現の終末部を「ね」や「だろう」のような伝聞や推定の形式にすることで、間接的に伝えることを報告している。

このように、話し手のネガティブ感情について当事者である聞き手に対する表現は、当事者でない（以下、非当事者と呼ぶ）聞き手に対する表現と異なる可能性がある。本研究ではネガティブな感情比喩に対する読み手の感情強度の評価に影響を与える要因として、話し手が想定する聞き手が当事者であるかどうか（聞き手の当事者性）を検討する。話し手がネガティブな感情的体験（例：もっとも退屈な授業を受けた）について述べる場合、聞き手が当事者である場合（その授業の先生）に用いる感情比喩は、聞き手が非当事者である場合（同級生）に比べて、ネガティブな感情の強度の評価が低くなる可能性がある。なぜなら、話し手は当事者に対して感情比喩を用いる場合、聞き手の感情状態がネガティブになりすぎないように配慮して、ネガティブな感情の強度がより低い感情比喩が用いられるためである。

話し手が想定する聞き手の当事者性と感情比喩に対する配慮の程度の評価

前述したポライトネス理論や岡本（2000）の先行研究を踏まえると、話し手はネガティブな感情的体験について当事者である聞き手を想定して伝える場合には、聞き手に配慮してより間接的に伝える可能性が考えられる。そのため、話し手が想定する聞き手が当事者であるかどうかは、感情比喩の読み手が表現に対して感じるネガティブな感情の強度だけでなく、配慮の程度にも影響を与えるかもしれない。しかしこれまでのところ、話し手が当事者である聞き手に対して産出した感情比喩から、読み手が配慮の程度をどのように評価するかについては明らかになっていない。話し手がポライトネス理論の予測するように感情比喩を産出しているのであれば、当事者に伝える感情比喩は非当事者に伝える感情比喩よりも、読み手が感情比喩から感じる配慮の程度の評価は高くなる可能性がある。

前節の感情の強度の議論と本節の配慮に関する議論を総合すると、次のような予測が立てられる。話し手が当事者である聞き手に対して産出したネガティブな感情比喩は、読み手からネガティブな感情の強度が低く、配慮の程度が高いと評価されると予測される。こうした結果が得られた場合、話し手が当事者である聞き手に対して産出した感情比喩に対する、読み手のネガティブ感情の強度評価と配慮の程度の評価との間に

関連があることが類推される。

本研究の目的

本研究の目的は、話し手が想定する聞き手が当事者であるかが、感情比喩の産出に与える影響を検討することである。また、話し手が想定する聞き手の当事者性による感情比喩の違いが、読み手による感情比喩に対する感情強度の評価と、表現から感じる配慮の程度の評価に与える影響も検討する。

研究1では話し手のネガティブな感情的体験を引き起こした聞き手を想定させて伝える条件（当事者条件）と、話し手の感情的体験を引き起こした聞き手を想定させずに伝える条件（非当事者条件）のそれぞれの条件で、感情比喩を収集する。

研究2では、話し手の想定する聞き手が当事者または非当事者であるかによる違いが、研究1で収集した感情比喩に対する読み手の感情強度の評価に影響を与えているかを検討する。

研究3では、話し手の想定する聞き手が当事者または非当事者であるかによる違いが、研究1で収集した感情比喩に対する読み手の配慮の程度の評価に影響を与えているかを検討する。配慮の程度の指標としては、参加者に表現の容赦のなさや間接性を評価させる。容赦のない言い方は聞き手の面子を脅かす可能性がある一方で、間接的な言い方は聞き手の面子を脅かす程度が小さいと考えられる。

本研究の研究2と研究3において、第三者の読み手に見立てられた参加者は、話し手の感情比喩がどのような聞き手を想定していたかについては知らされていないため、表現のみから感情強度や配慮の程度を推定する必要がある。こうした第三者の読み手の感情比喩の評価を明らかにすることは、私たちが表現のみに基づいて話し手の感情や含意を推論できるかについて示唆を得るうえで重要だと考える。

研究 1

方 法

参加者 大学生131名が調査に参加した。その中で、すべての質問に欠損なく回答した119名（男性41名、女性78名）を有効回答とした。平均年齢は20.1歳で、標準偏差は4.1であった。

刺激 参加者が比喩表現を産出する主題（たとえられる語）として、参加者が過去に体験したもっとも退屈な授業を聞き手に伝えることを想定させる状況（授業条件）と、参加者が過去に食べたもっともまずかった食べ物を聞き手に伝えることを想定させる状況（食べ物条件）を取り上げた（c.f., Beaty & Silvia, 2013; Silvia & Beaty, 2012）。

手続き 調査はLimeSurveyを使用したインター

ネット調査形式であった。参加者は個別にwebブラウザ上で課題に取り組んだ。参加者は年齢と性別を回答したのち、比喩表現を産出する課題に取り組んだ。参加者は、比喩表現の聞き手が主題（授業あるいは食べ物）の当事者（その授業の先生あるいはその食べ物を作った人）であることが想定される（当事者）条件と、比喩表現の聞き手が主題の当事者であることが想定されない（非当事者）条件の両方に参加した。また、すべての参加者が授業条件と食べ物条件の両方に参加した。以下に、授業条件の教示を示す。

「高校あるいは大学時代に受けてきた授業のなかで、最も退屈だったものを思い出してください。そして、その授業の担当の先生に伝えるという前提で、その最も退屈だった授業をたとえ表現を用いて説明してください。」

また、食べ物条件の教示は以下の通りである。

「あなたが今まで食べた他人の手料理のなかで最もまずかったものを思い出してください。そして、その食べ物を作った人に伝えるという前提で、その最もまずかったものをたとえ表現を用いて説明してください。」

なお、文中の下線部の箇所は当事者条件のみで挿入され、非当事者条件の教示では取り除かれた。それ以外の部分は、両条件でまったく同じ教示であった。

比喩表現を産出する際には、産出する比喩表現が表現したいことを十分に伝えるものであること、産出する比喩表現ができるだけ多くの人に理解してもらえるものであること、そして産出する比喩表現の書き出しを「この授業（食べ物）は～」とすることを求めた。すべての参加者が、授業の非当事者条件、食べ物の非当事者条件、授業の当事者条件、そして食べ物の当事者条件という順序で回答した。

調査計画 比喩表現の主題（2水準：授業、食べ物）と話し手が想定する聞き手の当事者性（2水準：当事者、非当事者）の完全参加者内2要因計画であった。

結 果

話し手が想定する聞き手の当事者-非当事者の各条件で産出された比喩表現を、次の項で述べる方法で分類した。

喩辞の内容に基づいた回答の分類 第1著者と、研究目的を知らない2名の研究協力者の計3名が、参加者から収集された回答を分類した。分類は、ある参加者の回答した比喩表現の喩辞部と、他の参加者の回答した比喩表現の喩辞部が、意味的に類似しているかどうかを規準として行った。はじめに各分類者が個別に

分類作業を行い、続いてそれぞれの分類結果について3名の分類者で合議した。分類作業と分類結果の詳細はAppendix 1にまとめた。

分類結果 Table 1に示すように、聞き手の当事者性の条件ごとに、授業の退屈さと食べ物のまずさを表す独特な比喩表現がみられた。授業条件においては、校長の話に関する表現(3文)が非当事者条件でのみ、ニュースに関する表現(3文)は当事者条件でのみみられた。また、食べ物条件においては、ゴミに関する表現(9文)が非当事者条件でのみ、味の喧嘩に関する表現(3文)は当事者条件でのみみられた。

一方で、非当事者条件と当事者条件の中には、両条件間で共通した喩辞を持つ比喩表現もみられた。たとえば、授業条件において、お経に関する比喩表現や子守唄に関する比喩表現がみられた。同様に、食べ物条件において、ゴムに関する比喩表現や、動物のエサに関する比喩表現がみられた。

最後に、比喩表現の主題それぞれについて、聞き手の当事者性の条件ごとに有効回答文に占める独特な比喩表現の割合を求めた。その結果、授業の退屈さに関する比喩表現の有効回答文において、非当事者条件のみにみられた比喩の割合は.28で、当事者条件のみにみられた比喩の割合が.39であった。また、食べ物のまずさに関する比喩表現の有効回答文において、非当事者条件のみにみられた比喩の割合は.42で、当事者条件のみにみられた比喩の割合が.45であった。授業の退屈さに関する非当事者条件のみにみられた比喩表現の割合は低いものの、他の条件では各条件に固有な

表現がみられた。

考 察

研究1より、話し手が想定する聞き手の当事者性の条件ごとに固有な比喩表現がみられた。これらの結果は、聞き手が当事者であるか非当事者であるかの違いが、話し手の比喩表現の産出に影響する可能性を示唆している。また話し手が想定する聞き手の当事者性の各条件で共通して産出された比喩表現もみられた。どちらの条件でもみられる共通の比喩表現は、話し手が想定する聞き手の当事者-非当事者の条件の違いに影響を受けなかった表現である可能性が高い。そのため、話し手が想定する聞き手の当事者性の影響を検討するうえでは分けて分析する必要があると考えられる。以降の研究では、聞き手が当事者条件、非当事者条件、両条件で共通してみられた比喩表現の3つに分けて分析を行うこととした。

研 究 2

方 法

参加者 研究1に参加していない大学生・大学院生24名(男性13名、女性11名)が参加した。参加者の平均年齢は21.3歳で、標準偏差は1.6であった。参加者数は、20～24名程度の参加者を対象に1要因参加者内計画の実験を行っている比喩表現の理解研究(e.g., Horton, 2007)に基づいて決定した。

刺激 研究1において分類された回答頻度の高かつ

Table 1
研究2で使用した代表的な比喩表現

主題	当事者性条件	比喩表現
授業	非当事者のみ	この授業は修行みたいだ この授業は朝礼時の校長の話みたいだ この授業はお葬式みたいだ
	共通	この授業はお経みたいだ この授業は子守唄みたいだ この授業は催眠術にかけられたみたいだ
	当事者のみ	この授業は頭の中をさーっと通り抜けるような内容だ この授業は単純作業みたいだ この授業はニュースを見ているみたいだ
食べ物	非当事者のみ	この食べ物はゴミみたいだ この食べ物は砂を食べているみたいだ この食べ物は腐った魚みたいな味だ
	共通	この食べ物はこの世のものではないみたいだ この食べ物は動物のエサみたいだ この食べ物はゴムみたいだ
	当事者のみ	この食べ物は食べたことのないような味だ この食べ物は唐辛子をそのまま食べているみたいだ この食べ物は味が喧嘩しているみたいだ

Table 2
比喩表現の感情の強度の評定値（研究2）

主題	当事者のみ		共通		非当事者のみ	
	M	SD	M	SD	M	SD
授業	4.30	0.80	4.96	0.83	5.03	0.84
食べ物	3.78	0.81	5.32	0.61	6.64	0.38

注) 授業の退屈さ：1：全く退屈でない-7：非常に退屈である。

食べ物のまずさ：1：全くまずくない-7：非常にまずい。

た上位10個の比喩表現うち、回答された文字数が他の回答に比べて短く、かつ喩辞の意味が理解しやすい比喩表現を合議で決定し、研究2で用いる刺激とした。刺激の条件として、(i) 話し手が当事者である聞き手を想定して産出した比喩表現のみが含まれる条件（当事者のみ条件）と、(ii) 話し手が当事者である聞き手を想定して産出した比喩表現のみが含まれる条件（非当事者のみ条件）と、(iii) それぞれの条件で共通してみられた比喩表現が含まれる条件（共通条件）の3つを設定した。研究2で使用した代表的な比喩表現をTable 1に示した^{3,4}。

手続き 実験は個別に実験室で行った。参加者はPC画面上の教示に従って実験に取り組んだ。はじめに、参加者に授業あるいは食べ物に関する比喩表現のどちらか一方を呈示し、各比喩表現から喚起される感情強度の評定を求めた。参加者に行った教示は以下の通りであった。

「ここでは、以下に呈示されている各表現を読んでいただきます。これらの表現を読んでどれくらい（退屈さ／まずさ）が喚起されるかを、「1：全く（退屈でない／まずくない）」から「7：非常に（退屈である／まずい）」の7件法で回答してください」

参加者が授業あるいは食べ物に関するすべての比喩表現に対して回答を終えた後、実験者が画面を切り替えて、もう一方の主題に関する比喩表現に対して同様

に回答を求めた。

授業条件と食べ物条件の呈示順序は参加者ごとにカウンターバランスした。また各主題条件内における比喩表現の呈示順序も2パターン用意し、回答順が評定に与える影響を排除した⁵。

実験計画 比喩表現の主題（2水準：授業、食べ物）と感情比喩の種類（3水準：非当事者のみ、共通、当事者のみ）を要因とする、2要因完全参加者内計画であった。

結果

各条件における比喩表現の感情強度の評定値をTable 2に示した。

分散分析（ F_1 は参加者分析、 F_2 は項目分析）を行ったところ、感情比喩の種類の主効果が有意であった（ $F_1(2, 44) = 63.87, p < .001, \eta_p^2 = .74$ ； $F_2(2, 30) = 12.35, p < .001, \eta_p^2 = .45$ ）。Shaffer法による多重比較の結果、共通条件と非当事者のみ条件が当事者のみ条件よりも評定値が有意に大きかった（参加者分析、項目分析とも $ps < .01$ ）。また、非当事者のみ条件が共通条件よりも評定値が有意に大きかった（ $p < .01$ ）。さらに、比喩表現の主題と聞き手の当事者性条件との感情比喩の交互作用が有意であった（ $F_1(2, 44) = 22.14, p < .001, \eta_p^2 = .50$ ； $F_2(2, 30) = 4.32, p < .05, \eta_p^2 = .22$ ）。単純主効果の検定の結果、非当事者のみ条件において、食べ物条件が授業条件よりも感情の強度の評定値が高かった（参加者分析、項目分析とも $ps < .05$ ）。

また、比喩表現の主題の主効果が参加者分析でのみ有意傾向であった（ $F_1(1, 22) = 3.97, p = .06, \eta_p^2 = .15$ ； $F_2(1, 30) = 2.87, n.s., \eta_p^2 = .09$ ）。

考察

研究2では、話し手が想定する聞き手の当事者性に基づく感情比喩の種類ごとに感情強度の評定値が異なるかを検討した。その結果、非当事者のみ条件は当事

³ 研究1の食べ物の当事者条件において「この食べ物は不思議な味がする」と、「この食べ物は独創的な味がする」という表現が分類された。これらの表現は当初比喩表現として想定され分類され、研究2と研究3においても刺激として用いられていた。しかし、これらの表現は、まずい食べ物の味を婉曲的に表現する際に用いる、慣用的な婉曲表現であり、比喩表現としては扱えない可能性があった。そこで、研究2と研究3においては、これらの2つの表現は除外して分析を行った。また、研究2と研究3でこれらの刺激を含めて分析しても、聞き手の当事者性が食べ物のまずさ（研究2）や、表現の間接性と容赦のなさ（研究3）に与える影響は有意であった（ $p < .05$ ）。

⁴ 研究2で使用した比喩表現、および研究3で使用した比喩表現とそれらの表現の研究1での回答頻度の全結果はAppendix 2にまとめた。

⁵ 参加者は感情強度評価を行ったのち、比喩表現に関わる印象評定課題に回答した。この印象評定課題は本研究と異なる目的で行われた。また、これらの印象評定はすべて研究2で報告した評定を行ったあとに行ったものであるため、研究2の結果に大きく影響を与えるものではないと考えた。

者のみ条件よりも感情強度の評定値が高かった。これは、話し手の想定する聞き手が当事者である場合には、読み手が感情比喩から感じるネガティブ感情の強度は低くなることを示しており、予測と合致した。また、比喩表現の感情強度の評定値に関して、共通条件は非当事者のみ条件と当事者のみ条件の中間の値であった。

以上の結果は、話し手の想定する聞き手の当事者性によって表現はばらつくが、特に当事者に対してのみ産出される比喩表現は、読み手にネガティブな感情の強度が低く見積もられる可能性を示唆している。

研究 3

方 法

参加者 研究1と研究2に参加していない大学生167名（男性65名、女性102名）が参加した。平均年齢は20.8歳で、標準偏差は4.5であった。研究3で参加者数を増やしたのは、インターネット調査で参加者の確保が容易であり、参加者を増やすことで研究2よりも結果の一般性を強く主張できると考えたためであった。

刺激 研究1で分類されたそれぞれの比喩表現について、分類された各喩辞の比喩表現の中で文字数が最も短い比喩表現を刺激とした。刺激は退屈な授業とまずい食べ物を主題とした。研究2と同様に、刺激条件として当事者のみ条件（例：この授業はニュースを見ているみたいな授業でした）、非当事者のみ条件（例：この授業はまるで修行だ）、共通条件（例：この授業は、お経を聞いているみたいでした）を設定した。なお、研究2では脚注5に述べたような理由から実験時間を短くする必要があり、刺激数やその内容について制限する必要があった。一方、研究3ではこうした制約がなかったため、研究1で分類されたすべての刺激を用いた⁴。

手続き 調査はLimeSurveyを使用したインターネット調査形式であった。参加者は個別にwebブラウザ上で課題に取り組んだ。参加者は授業条件か食べ物条件のいずれかに割り当てられた。授業条件の参加者は76名、食べ物条件の参加者は91名であった。参加者は比喩表現から受け取る印象を回答することが求められ、授業条件の参加者は授業に関する比喩表現について回答し、食べ物条件の参加者は食べ物に関する比喩表現に対して回答した。このとき、授業条件の参加者には「あなたが受けたことのない授業に対して誰かが述べた感想である」と想定させ、食べ物条件の参加者には「あなたが食べたことのない料理に対して誰かが述べた感想である」と想定させて、個別の比喩表現について回答させた。研究2では第三者の立場から評価するように明示的には教示していなかったが、研究3では第三者の立場から評価することを明示した。

なお、比喩表現の回答順は参加者間で固定した。

参加者は個別に呈示されるそれぞれの比喩表現に対して、表現の容赦のなさや表現の間接性を評定した。実際の教示は以下の通りであった。

「この調査では、あなたが受けたことのない授業に対して誰かが述べた感想であるという想定で、授業（＝あなたが受けたことのない授業）に関する様々なたとえ表現を評価いただきます。評定の項目は二種類あります。

一つはその表現の【きつさ】で、その表現がどのくらい容赦のない厳しい言い方であるのかについて、あなたが感じる程度を評価してください。

もう一つは【回りくどさ】で、その表現がどのくらい間接的で遠まわしな言い方であるのかについて、あなたが感じる程度を評価してください。

各評価項目は7段階（1：まったくそう感じない～7：とてもそう感じる）で評価してください。」

なお、参加者に教示するにあたって容赦のなさをきつさ、間接性を回りくどさとしたのは、本研究で評価を頼む容赦のなさや間接性をわかりやすく教示するためであった。

実験計画 比喩表現の主題（参加者間要因、2水準：授業、食べ物）と感情比喩の種類（参加者内要因、3水準：非当事者のみ、共通、当事者のみ）の2要因混合計画であった。

結 果

各条件の比喩表現の容赦のなさや間接性の評定値をTable 3に示した。

まず、比喩表現の容赦のなさの評定値を従属変数とした感情比喩の種類と比喩表現の主題の二要因分散分析（ F_1 は参加者分析、 F_2 は項目分析）を行ったところ、感情比喩の種類の主効果が有意であった（ $F_1(2, 330) = 158.31, p < .001, \eta_p^2 = .49$; $F_2(2, 64) = 9.01, p < .001, \eta_p^2 = .22$ ）。Shaffer法による多重比較の結果、非当事者のみ条件が当事者のみ条件と共通条件よりも評定値が有意に大きかった（参加者分析、項目分析とも $p < .05$ ）。

また、比喩表現の主題の主効果が有意で（ $F_1(1, 165) = 41.50, p < .001, \eta_p^2 = .20$; $F_2(1, 64) = 26.56, p < .001, \eta_p^2 = .29$ ）、食べ物条件が授業条件よりも評定値が有意に大きかった。また、参加者分析においてのみ比喩表現の主題と感情比喩の種類の交互作用が有意であった（ $F_1(2, 330) = 9.03, p < .001, \eta_p^2 = .05$; $F_2(2, 64) = 0.56, n.s., \eta_p^2 = .02$ ）。

次に、比喩表現の間接性の評定値を従属変数とした二要因の分散分析を行ったところ、感情比喩の種類の主効果が有意であった（ $F_1(2, 330) = 55.53, p < .001,$

Table 3
比喩表現の容赦のなさと同接性の評定値（研究3）

評定	主題	当事者のみ		共通		非当事者のみ	
		M	SD	M	SD	M	SD
容赦のなさ	授業	4.05	0.97	4.35	1.06	4.81	1.05
	食べ物	4.65	0.96	5.32	0.83	5.84	0.88
同接性	授業	3.75	0.56	3.59	0.73	3.52	0.79
	食べ物	4.12	0.76	3.10	0.73	3.13	1.01

注) 1: まったくそう感じない-7: とてもそう感じる。

$\eta_p^2 = .25$; $F_2(2, 64) = 3.72$ $p < .05$, $\eta_p^2 = .10$)。Shaffer法による多重比較の結果、当事者のみ条件が非当事者のみ条件と共通条件よりも評定値が有意に大きかった（参加者分析、項目分析とも $ps < .05$ ）。

また、参加者分析においてのみ、比喩表現の主題と聞き手の当事者性条件の交互作用が有意であった（ $F_1(2, 330) = 26.10$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .14$; $F_2(2, 64) = 1.85$, $n.s.$, $\eta_p^2 = .05$ ）。

最後に、本研究で収集した評定値間の関係性を明らかにするために、表現から感じる容赦のなさと同接性の評定値について、比喩表現ごとの参加者全員の評定平均値を対象としてピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、授業の退屈さと食べ物のまずさのそれぞれで有意な負の相関関係がみられた（ $r(31) = -.44$, $r(35) = -.68$, $ps < .05$, $.001$ ）。

考 察

研究3では、話し手が想定する聞き手の当事者性に基づく感情比喩の種類ごとに容赦のなさと同接性の評価が異なるかを検討した。その結果、容赦のなさについては、非当事者のみ条件の評定値が当事者のみ条件の評定値よりも大きかった。この結果は、話し手の想定する聞き手がネガティブ感情の当事者である状況でのみ産出された比喩表現が、話し手の想定する聞き手がネガティブ感情の当事者であることが想定されない状況でのみ産出された比喩表現よりも、読み手に容赦がない表現として受け取られることを示している。また、比喩表現の同接性の評定値は、当事者のみ条件の評定値が非当事者のみ条件の評定値よりも大きかった。この結果は、予測の通り、話し手の想定する聞き手がネガティブ感情の当事者である状況でのみ産出された比喩表現が、話し手の想定する聞き手がネガティブ感情の当事者であることが想定されない状況でのみ産出された比喩表現よりも、読み手に同接的な表現として受け取られることを示している。

また、評定値間の相関分析の結果から、表現の容赦のなさと同接性の間には中程度の負の相関があることが明らかになった。あくまでも推測に過ぎないが、同接的な言い方は聞き手の面子を脅かす程度が小さいために、容赦のなさが低く評価された可能性が考えられる。

以上の結果から、話し手の想定する聞き手が当事者か非当事者かによる感情比喩の違いによって、読み手の感情比喩に対する表現の容赦のなさと同接性の評価が異なることが示された。

総 合 考 察

本研究では、話し手が想定する聞き手が当事者であるか非当事者であるかが、産出される感情比喩と、産出された感情比喩に対する読み手の評価（感情比喩に対する感情強度と、表現から感じる配慮の程度）に与える影響を検討した。3つの研究の結果、当事者と非当事者の各条件に固有な比喩表現がみられ（研究1）、当事者であることが想定された聞き手に対する感情比喩は、非当事者であることが想定された聞き手に対する感情比喩よりも、読み手からネガティブ感情の強度が低く評価され（研究2）、表現から受ける同接性は高く、容赦のなさの程度は低く評価されること（研究3）が示された。これらの結果から、話し手がネガティブな感情の体験について表した感情比喩を産出する際には次のことが結論できる。話し手が想定する聞き手が当事者か非当事者かによって異なる比喩が産出される。読み手は、話し手が聞き手を当事者であると想定して産出した感情比喩に対して、ネガティブ感情の強度を低く評価する。さらに読み手は、話し手が聞き手を当事者であると想定して産出した感情比喩に対して、配慮の程度を高く評価する。

ポライトネス理論（Brown & Levinson, 1987）から、聞き手が当事者である場合に、話し手は聞き手に配慮した表現を選択することが予測された。このポライトネス理論の予測と一致するように、研究3において、第三者である読み手は、当事者に対する感情比喩を、非当事者に対する感情比喩よりも、配慮の程度が高いと評価した。ポライトネス理論に基づいて、話し手の聞き手に対する配慮が表現の選択に与える影響を検討した従来の研究は皮肉（e.g., Jorgensen, 1996; Pexman & Zvaigzne, 2004）や、ネガティブな出来事の伝達における接尾語の変化（岡本, 2000）に焦点を当てていた。しかし、本研究ではネガティブな感情比喩の伝達において、話し手が想定する聞き手の当事者性にもとづく感情比喩の違いが、読み手に異なる印象

を与えることを示した。これらの結果は、ボライトネス理論が、ネガティブな感情の体験に対して聞き手が当事者である状況における感情比喩の評価にも適用できる可能性を示唆した。

研究2と研究3において、参加者はその感情比喩がどういった産出状況（聞き手の当事者性）のもとで産出されたかについて知らされていないかった。それにもかかわらず、ネガティブな感情の強度（研究2）や配慮の程度（研究3）において感情比喩の種類の間で有意な差がみられた。このことは、読み手に見立てられた参加者が、話し手が感情比喩に込めた感情強度や配慮の程度を、呈示された感情比喩のみから推測している可能性を示唆している。

参加者は感情比喩の親しみやすさを基準として、話し手が表現に込めた感情強度や配慮の程度を推測していた可能性が考えられる。McGlone, Beck, & Pfister (2006, Study 1) は、ネガティブな主題についての婉曲表現を対象とした印象調査を行い、婉曲表現に対して感じる配慮の程度が、表現の親しみやすさ（特定語句の使用頻度などに対応した熟知性）と強い正の相関関係にあることを報告した。このことを踏まえると、本研究の参加者もまた、表現から感じる親しみやすさをもとに、ネガティブ感情の強度や配慮の程度を評価していたと考えられる。たとえば、本研究の非当事者条件で収集された表現の中には、ネガティブな感情を直接的に表現する際に親しみやすい表現（例：この食べ物はゴミだ）がみられた。一方で、当事者条件で収集された表現の中には、ネガティブな感情を婉曲的に伝える際に親しみやすい表現（例：この食べ物は味が喧嘩しているみたいだ）がみられた。このように、参加者は表現から感じる親しみやすさをもとに、話し手が聞き手に婉曲的に伝えようとして産出した表現なのか、直接的に伝えようとして産出した表現なのかを推測した可能性がある。その結果として、読み手は当事者のみ条件の感情比喩を非当事者のみ条件の感情比喩よりも、ネガティブ感情の強度を低く、配慮の程度を高く評価したと考えられる。

以下では、本研究の残された課題を述べる。第一に、話し手の比喩表現が読み手にどのように理解されるのかを、当事者性や配慮以外の社会的文脈を考慮して解明する必要がある。たとえば、二者の会話状況で比喩表現が使われる場合は、字義表現が使われる場合に比べて、参加者は話し手と聞き手の共通基盤の量を高く見積もるという研究結果が報告されている（Horton, 2007）。この知見を踏まえると、話し手と聞き手の共通基盤の違いによって、話し手が想定する聞き手に対して用いる比喩表現が異なる可能性がある。

第二に、研究2と研究3の実施方法において刺激に用いた比喩表現や例数が異なる点が挙げられる。本研究では、研究2においても研究3においても、研究

の主たる関心である感情比喩の種類の主効果は参加者分析と項目分析のそれぞれにおいて有意差がみられた。一方で、主題と感情比喩の種類の交互作用については、両研究において参加者分析でのみ有意（あるいは有意傾向）がみられたものの、項目分析は非有意であった。こうした結果は、比喩表現や参加者の例数による影響が考えられる。特に、効果量に基づく事前の例数設計は、重要であるものの、聞き手の当事者性の操作による第三者による感情比喩の評価を扱った類似研究が見当たらなかったため、本計画立案時には困難であった。事前の例数設計を行わないと、研究結果が予測と異なる（例：非有意な）場合に結果の解釈が困難となる。また、研究3においては参加者の比喩表現の回答順は参加者間で固定されていた。このため、本研究における参加者の回答に順序効果の影響が含まれる可能性は排除できていない。今後は本研究の結果に基づく事前の例数設計や、刺激の呈示順序を改良した研究が必要となる。

第三に、刺激収集の方法を改善することである。今回は参加者から収集された感情比喩を極力そのまま使用したため、材料文における比喩指標の有無（直喩と隠喩）や、文の時制については統制が取りきれなかった。また、収集された表現の中には、類似性認知（e.g., Bowdle & Gentner, 2005）などの従来の比喩理解で用いられる枠組みでは説明できない表現もみられた。さらに、研究1においては、すべての参加者は非当事者条件に回答した後に当事者条件に回答することが求められていた。今後は刺激収集段階での回答順だけでなく、コーパスからの感情比喩の収集も考慮して刺激の選定を行う必要がある。

第四に、本研究では感情強度と配慮の程度（容赦のなさ、間接性）を同時に検討したわけではないため、これらの間の直接的な関係は明らかになっていない。研究2と研究3の結果から、感情比喩から喚起されるネガティブな感情の強度と配慮の程度の評価の間には関連があると類推的に考えられる。これらの直接的な関係を明確にするのは今後の研究課題となる。

本研究の意義は、感情比喩における第三者の感情強度の理解に影響する状況要因を明らかにしようとしたという点である。これまでの研究は、感情強度の理解に影響を与える、話し手側の表現産出時の状況の違いについては検討がなされてこなかった（小島他, 2015; 松尾, 1998）。これに対して本研究は、話し手がどのような聞き手を想定して産出したのかによって、感情比喩の読み手に異なる感情強度が伝わる可能性を示唆している。

引用文献

Beatty, R. E., & Silvia, P. J. (2013). Metaphorically

- speaking: Cognitive abilities and the production of figurative language. *Memory & Cognition*, 41, 255-267.
- Bowdle, B. F., & Gentner, D. (2005). The career of metaphor. *Psychological Review*, 112, 193-216.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Clark, H. H. (1996). *Using language*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Fainsilber, L., & Ortony, A. (1987). Metaphorical uses of language in the expression of emotions. *Metaphor and Symbol*, 2, 239-250.
- Horton, W. (2007). Metaphor and readers' attributions of intimacy. *Memory & Cognition*, 35, 87-94.
- Jorgensen, J. (1996). The functions of sarcastic irony in speech. *Journal of Pragmatics*, 26, 613-634.
- 小島隆次・岡 隆之介・楠見 孝 (2015). 比喩表現が含む感情情報の Affective Grid による定量化可能性 日本認知心理学会第13回大会発表論文集, 61.
- 松尾浩一郎 (1998). 比喩で表現される感情の種類の判別——感情的意味空間の観点から—— 感情心理学研究, 5, 51-60.
- Mcglone, M. S., Beck, G., & Pfister, A. (2006). Contamination and camouflage in euphemisms. *Communication Monographs*, 73, 261-282.
- 岡本真一郎 (2000). 言語表現の状況的使い分けに関する社会心理学的研究 風間書房.
- Pexman, P. M., & Zvaigzne, M. T. (2004). Does irony go better with friends? *Metaphor and Symbol*, 19, 143-163.
- Russell, J., Weiss, A., & Mendelsohn, G. (1989). Affect grid: A single-item scale of pleasure and arousal. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 493-502.
- Silvia, P., & Beaty, R. (2012). Making creative metaphors: The importance of fluid intelligence for creative thought. *Intelligence*, 40, 343-351.

(2017年8月5日受稿, 2018年4月28日受理)

Appendix 1 :

研究1の分類作業と分類結果の詳細

不適切回答の除外 はじめに、参加者に産出された比喩表現のなかで、不適切な回答を除外した。不適切な回答は、以下の3つの基準のどれか1つでもあてはまる回答とした。すなわち、(a) 比喩表現でないもの(回答例:「この授業は眠くなった」、全条件で合計12文)、(b) 文量が多くかつ回答のどの部分を喩辞としているかわからないもの(最小で136字、最大で540字で書かれた回答。全条件で合計3文)、そして(c) 皮肉になっているもの(回答例:「この授業は静かでもとても集中できる授業でした」、全条件で合計5文)であった。有効回答は、授業の非当事者条件で115文、授業の当事者条件で114文、食べ物の非当事者条件で116文、食べ物の当事者条件で111文となった。

喩辞の内容に基づいた回答の分類 第1著者と、研究目的を知らない2名の研究協力者の計3名が、産出された比喩表現の喩辞の意味に基づいて分類を行った。回答の分類は、はじめに各分類者が個別に分類作業を行い、続いてそれぞれの分類結果について3名の分類者で合議した。各分類者が個別に分類を行う段階では、第1著者がすべての参加者の回答を印刷したリストを2名の研究協力者に配布し分類を行ってもらった。分類は、ある参加者が回答した比喩表現の喩辞部が、他の参加者が回答した比喩表現の喩辞部と、意味的に類似しているかどうかを規準として行われた。産出された比喩表現の中には、その比喩表現が成立する根拠について言及している回答もみられたが、この場合にも根拠の部分は無視して、喩辞部の意味のみを基準として分類を行った。そして、各条件で2つ以上の

回答が同じカテゴリとして分類された場合に、そのカテゴリを代表する暫定的なラベルを与えた。

次に各分類結果について3名の分類者で合議を行った。ここでは、個別に行われた分類結果を3名の分類者で共有し、最終的分類について合議した。はじめに、個別に行われた分類の際に付けられた暫定的なラベルが、3名の分類者間で一致しているかを確認した。暫定的なラベルが3名の分類者間で一致していた場合は、そのラベルを最終的な分類結果として採用した。この段階で3名の分類者間におけるラベルの分類一致率は、授業の非当事者条件で.67、授業の当事者条件で.54、食べ物の非当事者条件で.72、食べ物の当事者条件で.66であった。つぎに、3名の分類者間で暫定的なラベルが一致しなかった回答に対して、新たに一致するラベルが付けられるかを議論した。議論の後に、3名の分類者間で一致するラベル付けができた場合には、そのラベルを最終的な分類結果として採用した。議論の後に、3名の分類者間で一致するラベルづけができなかった場合には、どのラベルにも分類しなかった。

以上のラベルによる分類の結果、条件ごとにいずれかのラベルに分類された回答の比率は、授業の非当事者条件で.76、授業の当事者条件で.68、食べ物の非当事者条件で.74、食べ物の当事者条件で.58であった。

分類されたラベルの種類数 分類の結果、各条件で分類されたラベルは、授業の非当事者条件で16種類、授業の当事者条件で17種類、食べ物の非当事者条件で20種類、食べ物の当事者条件で19種類となった。

Appendix 2

Table A1
研究2で使用した比喩表現

主題	当事者性条件	比喩表現
授業	非当事者のみ	この授業は遊園地の待ち時間みたいだ この授業は全然知らない人のうわさ話を聞かされているみたいだ この授業は修行みたいだ この授業は朝礼時の校長の話みたいだ この授業はお葬式みたいだ
	共通	この授業はお経みたいだ この授業は子守唄みたいだ この授業はあくびが出るくらいだ この授業は流しっぱなしのラジオみたいだ この授業は催眠術にかけられたみたいだ この授業は時間の流れが遅くなったみたいだ この授業は外国人の言葉を聞いているみたいだ
	当事者のみ	この授業は小学生が大学の講義を聴くみたいだ この授業は先生の一人芝居を見ているみたいだ この授業は頭の中をさーっと通り抜けるような内容だ この授業は単純作業みたいだ この授業はニュースを見ているみたいだ この授業は先生の独り言を聞いているみたいだ この授業は先生が朗読をしているみたいだ
食べ物	非当事者のみ	この食べ物はゴミみたいだ この食べ物は砂を食べているみたいだ この食べ物は腐った魚みたいな味だ この食べ物は泥みたいだ この食べ物は吐くような食べ物だ この食べ物は吐瀉物を食べているみたいだ
	共通	この食べ物は人間の食べるものではないようだ この食べ物はうっかり砂糖をぶちまけたみたいだ この食べ物はうんこみたいだ この食べ物はこの世のものではないみたいだ この食べ物は動物のエサみたいだ この食べ物はゴムみたいだ この食べ物は石みたいに固い
	当事者のみ	この食べ物は食べたことのないような味だ この食べ物は唐辛子をそのまま食べているみたいだ この食べ物はスポンジを食べているみたいだ この食べ物は味が喧嘩しているみたいだ

Table A2

研究3で使用した授業の退屈さに関する比喩表現と、研究1における回答頻度

研究1での 条件	研究3での 条件	ラベル	研究1での 回答頻度	研究3で使った比喩表現
当事者	共通	お経	25	この授業は、お経を聞いているみたいでした。
非当事者	共通	子守唄	11	この授業はまるで子守唄のようだった。
共通	共通	睡眠	8	この授業はあくびが出るくらい退屈だった。
共通	共通	垂れ流し	6	この授業は流しっぱなしのラジオみたいだ
共通	共通	催眠術	5	この授業は催眠術を受けるようなものだ。
共通	共通	時間	3	この授業はまるで時間の流れが遅くなったかのよう長く感じられるものだった。
共通	共通	外国語	3	この授業は、知らない言語の授業のようだった。
共通	共通	独り言	2	この授業は、先生が黒板に向かって独り言を言っているようなものだった。
非当事者のみ	非当事者のみ	することがない	6	この授業はユニバの待ち時間と同じくらい退屈だ。
非当事者のみ	非当事者のみ	他人の話	3	この授業は、友達が自分の全然知らない人のうわさ話をむりやり延々と聞かせるようになってしまった。
非当事者のみ	非当事者のみ	修行	3	この授業はまるで修行のようだった。
非当事者のみ	非当事者のみ	校長	3	この授業は朝礼時の校長の話のようだった。
非当事者のみ	非当事者のみ	お葬式	3	この授業はまるで葬式のようだった。
非当事者のみ	非当事者のみ	呪文	2	この授業は呪文を聞いているみたい。
非当事者のみ	非当事者のみ	死ぬ	2	この授業は死ぬほど退屈である。
非当事者のみ	非当事者のみ	流れ作業	2	この授業はまるで工場の流れ作業のようであつた。教科書に書いてあることを淡々と話すだけで、要点が全くわからなかった。
当事者	共通	お経	11	この授業はまるでお経でしたね。
共通	共通	子守唄	8	この授業は子守歌でした。
共通	共通	睡眠	7	この授業は、寝てしまえば退屈であつた。
共通	共通	外国語	7	この授業は外国人の言葉を聞いているような授業でした。
共通	共通	垂れ流し	4	この授業は先生が淡々としゃべっているだけで、生徒に発言の機会がない。たとえやるなら、放送授業を受けているのと同じである。
共通	共通	時間	4	この授業は時間が止まったみたいにな長く感じられました。
共通	共通	催眠術	3	この授業は、催眠術にかけられているかのようなんです。
共通	共通	独り言	3	この授業は先生の独り言を聞いているようでした。
当事者のみ	当事者のみ	学制	5	この授業はレベルが高く、僕にとつてはとても難しかったです。それは小学生が大学の講義を聴いているようでした。
当事者のみ	当事者のみ	見せ物	4	この授業は頭の中をサーッと通りぬけるような内容です。
当事者のみ	当事者のみ	耳から通り抜ける	4	この授業は単純作業みたい。
当事者のみ	当事者のみ	単純作業	4	この授業は単純作業をサマッと通っているような授業でした。
当事者のみ	当事者のみ	ニュース	3	この授業はニュースを見ているみたい授業でした。
当事者のみ	当事者のみ	朗読	3	この授業はまるで先生が朗読するだけのよう授業でしたよ。
当事者のみ	当事者のみ	難しいゲーム	2	この授業は難解なパズルを解いているようでした。
当事者のみ	当事者のみ	文学	2	この授業は私にとって、難解な文学作品を読んでいるようなものだった。
当事者のみ	当事者のみ	身体的苦痛	2	この授業は頭が痛くなりそうです。

Table A3

研究3で使用した食べ物のまずさに関する比喩表現と、研究1における回答頻度

研究1での 条件	研究3での 条件	ラベル	研究1での 回答頻度	研究3で使った比喩表現
非当事者	共通	ゴム	8	この食べ物にはゴム食べてみたい。
共通	共通	人間の食べるものでない	6	この食べ物はまるで人間の食べるものではない。
共通	共通	レシビ	6	この食べ物はうっかり砂糖をおちまけてしまったかのような出来だった。
共通	共通	クソ	5	この食べ物はクソだ。
共通	共通	この世のものでない	5	この食べ物はまるでこの世のものではないようだ。
共通	共通	石	4	この食べ物は石のように固い。
共通	共通	エサ	4	この食べ物は、動物のえさのよう。
共通	共通	人体破壊	3	この食べ物は、舌が腐るかと思うほどまずかった。
共通	共通	調味料	2	この食べ物は辛すぎてまるで唐辛子をそのまま食べているようだった。
共通	共通	スポンジ	2	この食べ物はスポンジを食べているようなものでした。
共通	共通	雑草	2	この食べ物は、まるで道端の雑草を食べているのと同じくらいまずい。
非当事者のみ	非当事者のみ	ゴミ	9	この食べ物はゴミだ。
非当事者のみ	非当事者のみ	砂	6	この食べ物は砂を食べているみたい。
非当事者のみ	非当事者のみ	腐る	5	この食べ物は、腐った魚のような味がする。
非当事者のみ	非当事者のみ	泥	5	この食べ物はどろみだ。
非当事者のみ	非当事者のみ	吐く	4	この食べ物は吐きそうな食べ物だった。
非当事者のみ	非当事者のみ	吐瀉物	4	この食べ物は、まるで嘔吐物を食べているようだった。
非当事者のみ	非当事者のみ	苦汁	2	この食べ物は、とても苦く、まるで苦汁を飲んでいるみたいだった。
非当事者のみ	非当事者のみ	味がしない食べ物	2	この食べ物は味のしないガムを噛み続けたような味がした。
非当事者のみ	非当事者のみ	見た目が虫	2	この食べ物は、見た目が虫のようで、菌触りも果物の皮を食べているようだった。
当事者	共通	今まで食べたことのない	8	この食べ物は食べたことのないような味がします。
共通	共通	人間の食べるもの	5	この食べ物はまるで人間の食べるものではない。
共通	共通	レシビ	4	この食べ物はまるで砂糖と塩を間違えたみたいだよ。
共通	共通	クソ	4	この食べ物は糞のようだった。
共通	共通	この世のものでない	4	この食べ物は異世界のもののようです。
共通	共通	エサ	4	この食べ物は、動物のエサかと思った。
共通	共通	ゴム	3	この食べ物はまるでゴムのようですね。
共通	共通	石	3	この食べ物は石のように固い。
共通	共通	調味料	3	この食べ物は少し辛くて、唐辛子をそのまま食べているような感じだった。
共通	共通	スポンジ	3	この食べ物はスポンジを食べているような触感のする食べ物でした。
共通	共通	雑草	2	この食べ物は道端に生えていそうな草を食べたような味がした。
共通	共通	人体破壊	2	この食べ物は、胃を壊すのではないかと思うほどまずかったです。
当事者のみ	当事者のみ	暗唾	3	この食べ物は味が暗唾してる。
当事者のみ	当事者のみ	食べてもくなくない	2	この食べ物は溶けない味のしないマッシュマロをずっと食べているようだった。
当事者のみ	当事者のみ	土	2	この食べ物はまるで土でも食べているかのようになります。
当事者のみ	当事者のみ	海外料理	2	この食べ物は、日本人の口に合わない海外料理のような味がする。
当事者のみ	当事者のみ	宇宙人の口に合う	2	この食べ物は宇宙人の口に合うかもしれない。